



教授 大槻 剛巳

## 教育重点及び概要

2010年度は大学全体のカリキュラム改革のために、我々の教室は専門領域の講義を受け持つことはなかった。2011年度には、従来までの第3学年から第4学年に移行して、衛生公衆衛生学、予防医学、健康管理学、健康増進医学、中毒学等の社会医学系講義が「医学・医療と社会」というブロック講義で実施され、「衛生学教室」では環境保健と食品保健、加えて2009年度まで実施していた学外施設への見学・実習を受け持つ。特に見学・実習では、地域保健、感染症対策、疾病が原因で社会的政治的居弱者となった方々への施設、老人保健と福祉、労働衛生、健康増進対策、国民栄養などの観点から、百聞は一見に如かずの言葉通りに、現場を将来医師になる者としての視点で、更には2011年度からはほぼ臨床医学の講義も終わり、ほとんどの疾病の病態などを把握した上での観点で、見学・実習をしてもらうということは、これまで以上に見学・実習の効果も出るのではないかと期待している。社会医学系は、やはり全体の疾病構造や病態を把握した上での学習が重要な印象が強いことにも依る。この見学・実習については、集には個人々々に見学先に合わせた一人ずつ異なったレポートテーマを与え、感想とともに、ネットにてレポート提出。その集積は、該当施設の方にもネット閲覧していただくシステムを従来より取っており、e-Learningとして有効であろうと思う。更には試験も従来通り、e-Testing

で実施予定であり、温故知新、特に社会医学統合ブロックでは古き事象も学ぶ機会も多いので、先端的な教育手法も併せて実施していくことに専心したい。

なお、教室としては本来のこの担当授業以外に、大槻が第2学年の教養選択科目リベラル・アーツ2の中の「個人・社会と医療考」を担当、西村は第1学年の教養選択科目リベラル・アーツ1の中の「サイエンス11」の主任を務める。特に「個人・社会と医療考」は岡山理科大学が代表校を務める文部科学省平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」選定事業「『岡山オルガノン』の構築—学士力・社会人基礎力・地域発信力の融合を目指した教育—」における単位互換ライブ配信授業として実施する科目でもあり、教養科目として、本学学生のみならず、多くの若者たちに、人の健康を衛めること、あるいは環境などによる健康障害、そしてそういったことで社会的に弱者になった方々へどのように想いを馳せるかといった内容まで踏み込んで実施する。

学園関連施設では、例年通り、我々は医療福祉大学臨床工学科、医療短期大学臨床検査科、リハビリテーション学院の講義に参画し、研究のサポートを行う。

広く、衛生公衆衛生学、予防医学の概念を医学医療に携わる若者たちに伝えていくことが出来れば幸いと思って努力している。

○自己評価と反省

担当する領域を、割り振られた時間の中で、いかに工夫を凝らして学生諸子に医学医療の面白さ、醍醐味を伝えることが出来るのか、ということに腐心している訳だが、なかなか、道遠しという現実もある。発想を豊に自由に、自らを見つめること、そして創意工夫に努力することによって、今後とも将来の試験に合格するためというのも勿論であるが、医科学に対する興味を惹起できるように教室員一同精進したい。また e-Learning/Testing やライブ配信などの先端技術も効率よく導入出来ればと考えている。

## 研究分野及び主要研究テーマ

研究は教室として「環境免疫学」を実施しており、中でも「珪酸・アスベストの免疫影響」をその中心に据えている。このテーマは前任の植木絢子教授の頃より行っているもので、クボタショック以来の本邦でのアスベスト禍に関連した医学医療の関心の集中の以前より鋭意努力している処である。科学技術振興調整費平成 18 年度採択課題（重要課題解決型研究等の推進）として「アスベスト関連疾患への総括的取り組み」は大槻が代表を務め、平成 20 年度には中間審査も B 評価を頂戴し 2010 年度末にて終了した。また、ここ数年前後で住友財団環境研究助成（大槻）、安田記念医学財団癌研究助成（大槻）、武田科学振興財団特定研究助成[ I ]（大槻：愛知県がんセンターと名古屋大学との共同研究）、特別電源所在県科学技術振興事業：ものづくり重点4分野に関する基盤技術研究グループ研究（代表：大槻）採血によるアスベスト曝露と中皮腫担癌のスクリーニングチップの開発（グループ：岡山労災病院アスベスト関連疾患研究センターおよび岡山大学医学部呼吸器外科）、日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金若手研究奨励金（前田助教）、川崎医学・医療福祉学振興財団研究助成（西村（当時）講師、前田助教、熊谷助教）、両備てい園研究助成（西村（当時）講師、前田助教、熊谷助教）に採択していただき、加えて、第 18 回日中韓産業

保健学術集談会 Most Scientific Poster Award（西村（当時）講師）、第 78 回日本衛生学会総会会長賞（若手から選択：西村（当時）講師、熊谷助教）、The 9th International Conference of the International Mesothelioma Interest Group : Young Investigators Awards（日本人初：西村（当時）講師）、第 16 回日本免疫毒性学会学術大会奨励賞（西村（当時）講師）、Society of Toxicology (USA); Immunotoxicology Specialty Section, HESI Immunotoxicology Young Investigator Travel Award（2010 年、前田助教、2011 年熊谷助教）を受賞するなど、評価もされてきていると考えている。加えて、2010 年 4 月には International symposium on Occupational and Environmental allergy and Immune Diseases 2010 in KYOTO も主催出来、盛会裏に終了することができた。2011 年度には第 11 回分子予防環境医学研究会大会を主催する予定もあり、これらの活動を通じて、研究に精進したいと考えている。

### ○ 自己評価と反省

上記のごとく、我々の研究については、一定の評価は得てきているとは考えられるが、最終的に論文発表をすることによって研究の国際貢献が成されると考えるため、その努力をこれまで以上に講じていかなければならないと考える。

## 将来の改善方策

教育・研究両面で、基本的には厳しい自己評価と改善に向けた創意工夫、そして弛まぬ努力に尽きると考える。そして医科学研究である以上、今、この一瞬の実験が、あるいは、教育課程の中での一言ひとことが、現在のあるいは近い（もしくは遠い）将来の健康障害を有する人々への福音になるべきものであらねばならないということ片時たりとも忘れないように心がけることが必要であろうと考える。